

【論 説】

スリランカにおける 1950 年代の 政治変革と仏教僧

川 島 耕 司

目 次

はじめに

- 1 仏教僧の組織化と EBP
- 2 ウィジェーワルダナ家とケラニヤ寺院
- 3 ブッダラッキタとバンダーラナーヤカ政権
- 4 グナーナシーハと政治
- 5 ウィマラワンサと BC 協定

おわりに

はじめに

1931年のドノモア憲法の施行と仏教僧の本格的な政治参加の始まりは明らかに関連している。イギリス植民地下セイロンにおいて制定されたこの憲法は男女の普通選挙をもたらしたかなり先進的なものであった。しかしこれによって有権者数は急増し、それまで政治とはほぼ無縁であった多数の人びとが投票権を手に入れた。植民地下において富と地位を築いてきた都市エリートたちがこの状況下でとった選挙戦術の一つが圧倒的多数の宗教である仏教とのつながりをアピールすることであった。その目的のために仏教僧たちが利用されたのだ。しかし、1940年代になると仏教僧たちのなかには自らの政治的影響力を自覚し、より主体的に政治に参加しようとする人びとが現れ始めた¹⁾。「政治的比丘」と呼ばれた彼らの動きはその後さらに強まり、1956年の総選挙の結果を左右した重要な要因の一つとなった。このとき彼

スリランカにおける 1950 年代の政治変革と仏教僧（川島）

らは特に農村地域において活発に活動した。家々をまわり、政権を批判し、公用語政策における「シンハラ・オンリー」と仏教の保護を訴えた²⁾。仏教僧たちからの圧倒的な支援を得るなかで S.W.R.D. バンダーラナーヤカは勝利した。しかしこの選挙がもたらした政治変革はシンハラ・タミル間の、あるいは仏教徒と非仏教徒との間の対立をさらに深める原因となった。

それゆえ、スリランカの民族問題の展開を考えると、この時代における仏教僧たちの政治参加のあり方を考察することは明らかに重要である。本稿ではこの点に関して特に主導的な役割を果たしたと思われる 3 人の仏教僧に注目し、その政治的姿勢の特質と差異について考えたい。この時代の仏教僧と政治との関わりに関しては、リギンズやタンバイヤーを含む人びとがすでにかんりの程度言及して来た。しかしどのような仏教僧がどのように関わったのか、彼らの間にはどのような姿勢の違いがあったのかに関しては必ずしも明らかになっていない。そのためともすれば同質的なものとして仏教僧コミュニティが扱われる傾向があったようにも思われる。しかしながら、スリランカの仏教僧各人の政治や経済に対する姿勢には実際かなりの違いがある。今日の社会においてもそうであるし、そして間違いなく 1950 年代においても仏教僧の思想と行動はきわめて多様であった。本稿では仏教僧コミュニティ内での多様性に注目しつつ、1950 年代スリランカにおいて政治的に活動した指導的な仏教僧の活動とその特質を検討していきたい。

1 仏教僧の組織化と EBP

1950 年代のスリランカ政治におそらく最大の影響力を与えた仏教僧団体は EBP (Eksath Bhikkhu Peramuna : 統一比丘戦線) であった。この名が示すとおり、この団体は異なる仏教僧組織が合同してつくられたものである。その一つはスリランカ大仏教僧協会 (Sri Lanka Maha Sangha Sabha) であった。後述するようにこの団体は在家信者であった L. H. メッターナンダ、N. Q. ダヤス、そして仏教僧グナーナシーハが中心となって設立されたもので

ある。そしてもう一つの団体が全ランカ比丘会議（Samastha Lanka Bhikkhu Sammalanaya）であった³⁾。この組織が設立された1946年ごろには、ますます活発化する仏教僧たちの政治的活動を抑えようとする都市エリートたちの動きが強まっていた。そうした動きに対抗するために仏教僧たちが創設したのが全ランカ比丘会議であった。彼らは利己的な指導者たちを一掃し、「政治状況を浄化する」ことを訴えていた⁴⁾。エリートたちにとってはこうした彼らの存在は明らかに不都合なものであった。

上記の二つの組織が合同してできたEBPの指導層と一般の仏教僧の大多数はアマラプラ派とラーマンニャ派に属していたと言われる。またEBPには低位カースト出身で左派的傾向をもった仏教僧がより多く所属していたとも言われる。広大な土地をもつこともなく、比較的貧しい寺院に属していた仏教僧たちがEBPの多くを占めていたのである⁵⁾。EBPのなかで支配的であったのは低地地域の出身の仏教僧たちであったとも言われる⁶⁾。そしてこのことは、特にキャンディ地域において「高位カーストでより保守的な仏教僧たち」の懸念を引き起こしていた⁷⁾。

EBPはシンハラ地域のすべてに支部をもっていた。先にも触れたように、仏教僧たちの活動、特に農村部における戸別訪問がバンダーラナーヤカの1956年の勝利の最も決定的な要因になったとも考えられた⁸⁾。こうした「比較的良好に組織化されており、きわめて声の大きい」仏教僧たちの台頭に危機感を抱いたジョン・コタワラワ首相（1953-56在任）はシャム派のマルワッタ支派とアスギリヤ支派のマハーナーヤカたちに仏教僧たちに対して政治活動をやめるように指令を出すことを求めた。しかしマハーナーヤカたちがコントロールできたのはわずかであった⁹⁾。

多数の仏教僧たちが組織化され、政治運動に参加した理由の一つは、明らかに当時ますます多くの仏教僧たちが自らの政治的影響力を自覚し始めていたからであった。1956年の総選挙における仏教僧の貢献が広く認知されるなかで、仏教、そしてそれを代表する仏教僧の政治的影響力はさらに大きくなった。選挙後の1957年頃に書かれたイギリスの外交文書は次のように記

スリランカにおける 1950 年代の政治変革と仏教僧（川島）

している。

今日特に仏教は極端なナショナリズムと結びつき、政治的で好戦的な様相を強く示している。著名な地主であり、キャンディ地域の選挙区選出の議員であり、キリスト教徒であった少なくとも一人の大臣は、祖先の仏教を復活させることは政治的に好都合であるとみなした。懐疑的であるとして悪名高かった政治家たちは、サフロン色の僧衣をまとった比丘（仏教僧）への敬意を公の場で強く示すが、それは僧侶たちの影響が彼らの政治的展望を開くことにも台なしにすることにもつながるからである¹⁰⁾。（括弧内は原文）

こうしたなかで自らの政治的影響力を自覚し始めた仏教僧たちはさまざまな政治的要求を実現しようと現実の政治に関与し始めた。次にみるブッダラッキタはこのような仏教僧たちの一人であった。

2 ウィジェーワルダナ家とケラニヤ寺院

マーピティガマ・ブッダラッキタ（Mapitigama Buddhakkitha, 1921-1967）は EBP の指導者として 1956 年の政治変革にきわめて大きな影響力をおよぼした。彼は 1959 年のバンダラナーヤカ暗殺の黒幕であったとされる人物としても知られている。さらに彼は有名なケラニヤ寺院（Kelaniya Raja Maha Vihara）の住職でもあった。この寺院は「最も富裕で重要な」仏教寺院の一つであり、彼の財力や政治的影響力の大きな部分は間違いなく彼のこの地位に由来していた。自らの地位を十分に生かし、ブッダラッキタは 1956 年の総選挙においてバンダラナーヤカのためにかかなりの時間と資金を使った¹¹⁾。

ブッダラッキタがこの歴史的大寺院の住職になったのは彼が 26 歳の時だった。彼が若くして最高位の僧職に就任することができたのは、この寺院の檀家であり、支援者であったウィジェーワルダナ家、特にドン・チャールス・ウィジェーワルダナ（Don Charles Wijewardena）との関係によるところが大きい。ウジェワルダナ家はコロombo郊外に位置するケラニヤ地域にお

ける主導的な一族であり、ケラニヤ寺院とも密接につながっていた。この寺院が建立された地点はブッダが訪れたランカ島内の3箇所の一つであるとされる。また伝説によるとこの地は、有名な歴史上の人物であるドットゥギヤムヌ王の母であるウィハーラ・マハー・デーウィ (Vihala Maha Devi) の故郷でもある。ウジェワルダナ家とこの寺院とのつながりは、1927年に篤志家として知られるヘレーナー・ウィジェワルダナ (Helena Wijewardena) がこの寺院の改修工事のために多額の資金を提供したことからも分かる¹²⁾。

ウィジェワルダナ家は製材所を営む木材商人であった。買い付けられた木材はケラニ川沿いの製材所で加工された。植民地都市コロomboでは19世紀末ごろから建築ブームが起き、このブームのなかで一族は財をなした。彼らは政府の庁舎、ホテル、銀行、商店などへ木材、煉瓦、砂を供給した。さらに彼らは土地への投資から巨額の利益を得た。たとえばコロombo市内の大きな交差点に近い土地を購入し、値上がり後に転売するといった手法で富を蓄積した¹³⁾。また、ドン・チャールス・ウィジェワルダナの母である前述のヘレーナーの一族もまた、オランダ時代から植民地政庁とのつながりのなかで莫大な富を得ていた。彼らは植民地政庁から取得した居酒屋、運河通行、ギャンブル施設への課税権から、そしてココナツ・プランテーションや都市の土地への投資から巨利を得ていた¹⁴⁾。

ケラニヤ寺院に檀家会 (dayaka sabha) がつくられるとヘレーナー・ウィジェワルダナの息子であるドン・ウォールター・ウィジェワルダナが檀家会の初代会長となり、寺院の運営を監督するようになった。このドン・ウォールターの死後に新会長になったのが弟のドン・チャールス・ウィジェワルダナであった¹⁵⁾。ブッダラッキタは特にこの人物の支援によってケラニヤ寺院の住職となり、莫大な財力を手にすることになった。

ダ・シルワトリギンズによれば、ドン・チャールスは常軌を逸した奇行で知られる人物であった。彼はケラニヤ寺院の有力な支援者であったが、ますます専制的になるその姿は檀家会の他のメンバーたちの反発を招いた。彼はそのため檀家会を退会することになるのだが、その時の住職 (vihara

スリランカにおける 1950 年代の政治変革と仏教僧（川島）

hadhipathi) であったマピティガマ・ダンマラッキタとのつながりは持ち続けた。1947 年 7 月に急性の高血圧症のためにこの住職の死期が近いことを知ると、ドン・チャールスはブッダラッキタを後継者とする旨の遺書を住職に書かせた。その後、この住職は 1947 年 7 月 17 日に死去し、当時わずか 26 歳のブッダラッキタがこの大寺院の新住職になったのである¹⁶⁾。ブッダラッキタはこうして大寺院の財力を左右する権限を得た。1936 年に 15 歳で出家していたので、彼が住職になったのは出家後 10 年ほどのことであった。ちなみにドン・チャールスがブッダラッキタの支援者になったのは彼が 19 歳の時だった¹⁷⁾。

しかしながら、ケラニヤ寺院の檀家会の会員たち、特に有力者の一人である J. R. ジャヤワルダナ (Junius Richard Jayewardene : 後の首相、大統領) はブッダラッキタが年長の修行僧たちを出し抜いて寺院の最高権力者になることを許さなかった。ウィジェーワルダナ家とジャヤワルダナ家との間には姻戚関係があり、J. R. はドン・チャールスの甥にあたった。しかし両者の対立は根深く、J. R. は裁判によってドン・チャールスが支援するブッダラッキタをケラニヤ寺院の住職の地位から排除しようとした¹⁸⁾。この裁判はかなり長く続いたが、1950 年 4 月に判決が出た。これによって前住職の意志の法的効力が確認され、ブッダラッキタの地位が否定されることはなかった。しかしその後もブッダラッキタと J.R. との政治的対立は続いた¹⁹⁾。

ブッダラッキタと J.R. ジャヤワルダナとの間の最大確執はケラニヤ選挙区をめぐるものであった。それはすでに 1947 年に生まれていた。この年の総選挙においてブッダラッキタは反 J. R. キャンペーンを行った。しかし、J. R. はこの選挙に勝利し、与党統一国民党 (United National Party) 議員の一人となった。1951 年にバンダーラナーヤカがスリランカ自由党 (Sri Lanka Freedom Party) を設立すると、ブッダラッキタはこの政党の創立メンバーとなった。上述したように 1950 年には裁判によって彼の住職としての地位は確定していた。地位確定後の 1952 年に行われた総選挙においても彼は J.R. に対抗した。ドン・チャールスの妻であった前述のウィマラー・

ウィジェーワルダナがこの時スリランカ自由党から出馬したのであるが、ブッダラッキタはこの寡婦を支援したのである²⁰⁾。ウィマラーは共産党からも支持を得たため J. R. は苦戦したが、結果的にこの時もまた J. R. が勝利した²¹⁾。しかし、ブッダラッキタ陣営との3度目の選挙戦となった1956年の総選挙においては J. R. は落選した。この時スリランカ自由党はケラニヤ選挙区においては R. G. セーナナーヤカを立てた²²⁾。この選挙はバンダーラナーヤカが「シンハラ・オンリー」を主張して地すべりの勝利を収めた選挙である。統一国民党のなかでも最も有力な政治家の一人であった J. R. はこの時スリランカ自由党の候補者に敗れたのである。

ところで、前述したようにウィジェーワルダナ家はさまざまな事業に携わっていたが、印刷メディアにおける事業の成功のために現在ではおそらく最もよく知られている。篤志家として知られた前述のヘレーナーとその夫の間には7人の息子があったのだが、その3番目がメディアで大成功を収めたドン・リチド (Don Richard) である。ブッダラッキタを支援したドン・チャールズはその弟であった (ちなみに後にスリランカ首相、大統領となったラニル・ウィックラマシンハはドン・リチドの孫である)。またヘレーナーには二人の娘がいたが、そのうちの一人はジャヤワルダナ家に嫁いだ。彼女の息子の一人が J. R. ジャヤワルダナである²³⁾。

ドン・リチドはドン・チャールズとともにシンハラ語新聞である『ディナミナ (Dinamina)』を買収した。この買収を彼らに勧めたのは植民地期の有力政治家であった D. B. ジャヤティラカであった²⁴⁾。この買収によってドン・チャールズはこの新聞の半分のシェアを握ることになったが、「他の興味関心」のために経営から離れた。しかし兄のドン・リチドは、その後さまざまな新聞を発行し続け、レイクハウスとして知られるメディア関連企業 (正式名称は Associated Newspapers of Ceylon Limited) の創設者となった²⁵⁾。レイクハウスは英語、シンハラ語、タミル語の新聞を発行するスリランカで今日においてもおそらく最もよく知られたメディア企業である。

どのような「興味関心」のためにドン・チャールズが新聞の経営から離れ

スリランカにおける 1950 年代の政治変革と仏教僧（川島）

たかは必ずしも明らかではない。しかし彼が著作の執筆のために多くの時間を必要としていたことは間違いない。実際ドン・チャールスは 700 ページにもおよぶ『寺院における反乱 (*The Revolt in the Temple*)』という著書を 1953 年に出版した。これはケラニヤ寺院と「シンハラ人種」に関する「イデオロギー的著作」であり²⁶⁾、アナガーリカ・ダルマパーラの著作よりも「格段に熱狂的で戦闘的」なものであったともされる²⁷⁾。ドン・チャールスはここで、「ランカの歴史はシンハラ人種の歴史である」、シンハラ人は 2,500 年前に「仏教の精神的遺産の保全」を委託されたと主張した²⁸⁾。

ドン・チャールス・ウィジェーワルダナは、明らかにワルポラ・ラーフラと多くを共有していた。ラーフラはダルマパーラの影響を受けつつ「社会奉仕」という概念を提唱した人物である²⁹⁾。1940 年代の「政治的比丘」の台頭のなかでその動きを正当化することになったこの考えは独立後スリランカのサンガ（出家僧団）にも大きな影響を与えたが、その思想をいち早く実行に移した仏教僧の一人がブッダラッキタであったと言ってもよい。ラーフラ自身とこれら二人、つまりドン・チャールスとブッダラッキタとの間には直接の交流もあったようである。ドン・チャールスの妻であった前述のウイマラーは、当時コロomboにあったウィジェーワルダナ家では仏教僧を含む人びとが会合を開き、ドン・チャールスとブッダラッキタと「ラーフラ師として言及された仏教僧」は 3 人とも「仏教のいくぶん現代的なアプローチ」を唱えていたと述べている³⁰⁾。

ドン・チャールスは、彼の『寺院における反乱』のなかでラーフラが強調した「社会奉仕」の重要性を訴えた。ニルヴァーナという理想は平静さという最終的な徳だけでなく、「愛、共感、共苦を含む能動的で行動的な状態」であるとし、その目標は「禁欲的な純粹さや現世からの孤立ではなく社会奉仕である」と彼は記した。また、今日の仏教の衰退は仏教僧の自己利益、貪欲、無知のためであると主張した。さらに最も多くの仏教僧が所属するシャム派では「特定のカースト」のみに得度が許されていること、低地の僧の方が数が多いにもかかわらずキャンディ地域の仏教僧によって支配されている

こと、「最も学識のある」低地の仏教僧たちが中枢部から排除されていることを彼は批判した³¹⁾。

3 ブッダラッキタとバンダーラナーヤカ政権

前述したように、EBPの指導者としてブッダラッキタは1956年の選挙戦において明らかに大きな影響力を発揮したのであるが、ゴイガマであるブッダラッキタが非ゴイガマが多数を占めるとされるEBPの僧侶たちのなかでこのような大きな影響力を発揮できたのはなぜなのだろうか。おそらくそれは一つには、すでに何度も言及したように、彼が富裕で権威ある寺院の住職であったからであった。彼はケラニヤ寺院の潤沢な資金を使い、ほとんどすべての人民統一戦線(Mahajana Eksath Peramuna:スリランカ自由党を中心とする選挙連合)の選挙区をまわり、演説を行い、仏教僧たちの政治的活動を指揮した³²⁾。ただそれに加え、ゴイガマ・カーストに属していたという事実そのものが何らかの利点となったとも推測し得る。この点に関して、現代におけるニカーヤとカースト意識について調査を行ったジャヤスーリヤの指摘は興味深い。

ジャヤスーリヤによると、在家信者を含む調査対象者すべてが、仏歯寺や他の主要な仏教施設の管理は、高位カースト、特にゴイガマの仏教僧たちによってなされていることを知っている。またなかには、低位カーストの人びとは「劣等コンプレックス」をもっているので僧侶として責任ある役割を果たすことは難しいと返答をする者もあった。さらに、「我々が崇敬できる者に得度を授けよ」という勅令を引用する者もいたが、これは今日においても一般的な社会的態度になっていると言う³³⁾。つまり、大半の人びとは仏教僧のカーストを意識しており、少なくとも一部の人びとは低位カーストの仏教僧への差別意識を明らかに持っている。現在よりもカースト意識が強固であったと思われる1950年代において仏教僧のカーストは間違いなくより重要であった。人口の約半数を占める「高位カースト」ゴイガマへの影響力と

スリランカにおける 1950 年代の政治変革と仏教僧（川島）

いう点において、非ゴイガマ、つまり低位カーストの仏教僧よりもゴイガマの仏教僧の方が有利であることは十分にあり得ることである。ブッダラッキタが EBP のなかで指導的地位を占めることができた一因にそうしたカーストをめぐる事情があったのではないだろうか。

新政権においてもブッダラッキタの影響力は明らかに大きかった。首相が彼にいかに配慮していたかは、宗教的祝福を得るための場としてケラニヤ寺院が選ばれたことから分かる。当のブッダラッキタはそのことを大いに喜んだようである。新首相と政府の要人たちがケラニヤ寺院に参拝したとき、「セイロン王が高位の僧侶にアドバイスを求めてやって来た昔のようだ」と述べたという³⁴⁾。こうした密接な関係のなかでブッダラッキタはさまざまな手段で政権に影響力を与えようとした。まず、彼が強く支援したウィマラー・ウィジェーワルダナが保健大臣になったことにより、彼女を通じて政治的影響力を行使しようとした。また、彼は首相や他の大臣とも個人的にコンタクトをとることができ、自らが指導者であった EBP を使って圧力をかけることもできた。さらに、スリランカ自由党の執行委員の一員としても影響力を行使することができる立場にあった³⁵⁾。

しかしながらブッダラッキタの要求の多くは受け入れられなかった。この仏教僧は当時二つの大きな事業に関わっていた。一つはコロombo 共同海運 (Associated Colombo Shipping Lines) という海運会社である。もう一つはカンタライにある砂糖工場に関するものであった。ブッダラッキタと彼の仲間たちはこの二つの事業に多額の投資を行っており、この取引に対するバンダナーヤカの支援の確約をすでに得ていたとも言われていた。しかし、海運業に関しては、首相は「政治的反対」を考慮して政府の海運契約に係る調査委員会を立ち上げることにした。その結果、ブッダラッキタたちの海運会社に長期契約が与えられることはなくなり、この会社は大きな損失を被った。砂糖工場に関しては、彼らは工場建設の下請け事業に関与することになったが、「議会の左翼議員たちによるかなりの扇動」の後にこの下請け契約は取り消されることになった。それによるブッダラッキタたちの損失は

90万ルピーにおよんだ³⁶⁾。

この二つのプロジェクトの失敗の責任はひとえに首相の不親切な態度にあるとブッダラッキタはみなしたと言われる。もともと彼はバンダーラナーヤカが首相の座に就いたころから首相に対する苦々しい思いを表明していた。首相への不満は上記の2事業の失敗によって明らかに強まった。当時少なくとも一部の仏教僧たちは、バンダーラナーヤカを政権の座につけたのは彼ら自身であり、必要ならば引きずりおろすことも可能であると信じて疑わなかったと言われる³⁷⁾。こうした背景の中で、ブッダラッキタ自身もバンダーラナーヤカをスリランカ自由党の総裁の座から排除しようと活発に動いていた。首相は仏教僧によって射殺されるべきだと何度も言っていたとも報告されている³⁸⁾。こうしたなかでバンダーラナーヤカは1959年9月に僧衣を着た者からの銃撃を受け、暗殺された。その後、この事件に関わったとされた3人が死刑判決を受けた。その3人とは、実行犯とされた仏教僧タルドゥウェー・ソーマラーマ、首謀者とされたブッダラッキタ、そしてその協力者H. P. ジャヤワルダナであった（ただしその後ブッダラッキタとジャヤワルダナは終身刑へと減刑された。ブッダラッキタは1967年に獄死した³⁹⁾）。

独立後のスリランカにおいてはビジネスに関与し、蓄財する仏教僧たちがたびたび現れた。ブッダラッキタはそのさきがけの一人であったとも言える。サルボダヤ運動の創始者であるアーリヤラトネは、ブッダラッキタに率いられた一派は利己的な動機によって1956年の「革命」を望ましくない結末へとそらしてしまったと記している⁴⁰⁾。ブッダラッキタが1940年代の「政治的比丘」たちの活動にルーツをもつ運動の指導者の一人であったことは間違いない。しかし彼の動機の大きな部分はきわめて利己的で実利的なものであった。彼は仏教僧としての政治的影響力を利用して、個人的な経済的利益を追求した。ただ1950年代に主導的に政治に関わった仏教僧はもちろん彼だけではない。次にみるグナーナシーハはブッダラッキタとはかなり異なる人物であったようにみえる。

4 グナーナシーハと政治

前述したように 1956 年の総選挙において大きな役割を果たした仏教僧の団体である EBP（統一比丘戦線）はブッダラッキタの全ランカ比丘会議がもう一つの仏教僧の団体と合同して創設されたものであった。その団体はスリランカ大仏教僧協会と呼ばれたものであるが、その設立に貢献した仏教僧の一人が本節で扱うヘンピタゲデラ・グナーナシーハ（Hempitagedera Gnanaseeha, 1909-1981）である。

グナーナシーハはラーマンニャ派の仏教僧であった。主にラトナプラ地域で学校や仏教僧の訓練センターをつくるなど、農村の貧困やカーストに関わる社会奉仕活動を行い、人望を集めていた。ラトナプラに行政長官として赴任してきていた N.Q. ダヤスと 1953 年頃に出会い、両者は仏教徒の組織化に向けて尽力することになった。彼らはまずはサバラガムワ地域に、その後全国に仏教徒協会（Baudha Sasana Samiti）という組織をつくった。この仏教徒協会は 3,500 以上にもなったと言われている⁴¹⁾。この仏教徒協会はほぼ間違いなく在家信者中心の組織であったが、仏教僧たちの要請に応え、仏教僧の教育にも関わった。また関係者間の意思疎通を図るために週刊誌が発行された。この雑誌においては、仏教徒学校の水準向上の問題、病院における看護師が抱える問題、シンハラ語を公用語化する重要性などが議論された⁴²⁾。

その後彼らは、アーナンダ・カレッジの校長を務めた L. H. メッターナンダとともに仏教僧たちの組織化に尽力し、仏教僧協会（Sangha Sabhas）と呼ばれる団体をスリランカ各地につくった。この協会の数は 1954 年までには 72 になった。こうしてつくられた各地の協会を束ねる中央組織となったのが前述のスリランカ大仏教僧協会である⁴³⁾。このように彼らは在家信者や仏教僧を全国的に組織化することに成功した。これによって彼らのメッセージが全国各地、特に農村部に向けてより深く浸透することになった。実際この組織は 1956 年の選挙において農村部における得票に大きく貢献したと

言われる。『仏教の裏切り』として知られる仏教委員会の報告書をこの時一般大衆に伝えた活動は「ヘンピタゲデラ・グナーナシーハ導師に率いられたすべてのニカーヤの聖職者たち」であったとサルボダヤの創設者であるアーリヤラトネはその回顧録で記している⁴⁴⁾。

影響力があったこの『仏教の裏切り』の編集自体にもグナーナシーハは関わった。報告書は仏教の現状に関する全国的な調査から生まれたものであるが、アーリヤラトネによれば、収集された大量のデータをまとめる作業の中心となったのはL. H. メッターナンダであった。グナーナシーハはサンガに関連する資料をまとめる作業をアマラプラ派の著名な僧侶であったマディヘー・パンニャシーハ (Madihe Pannaseeha, 1913-2003) とともに行った⁴⁵⁾。

このような経緯からグナーナシーハは選挙後もスリランカ自由党との関わりを持ち続けた。当時のスリランカにおいてもほとんどの政党が仏教僧に敬意を払っているという事実を公にすることに熱心であった。「公的に礼拝したり、選挙運動の後に感謝を示したりすることをしないシンハラ人の政党は全くない」という状態であった。また各政党は仏教僧をその中に取り込んでおり、グナーナシーハもまたこうした背景のなかでスリランカ自由党に関わり続けたのである。ちなみに、当時共産党に深く関与していたのは、きわめて初期の「政治的比丘」の一人であるウダケンダワラ・サラナンカラ (Udakendawela Saranankara, 1902-1966) であった⁴⁶⁾。

1956年の政治変革に大きく貢献し、スリランカ自由党と関わりをもったという点においてはグナーナシーハはブッダラッキタと共通する。実際、グナーナシーハはスリランカ自由党内で活発に政治活動を行っていた。しかし、自らの政治的影響力を使って私利私欲をみたそうとしたブッダラッキタと彼とはきわめて異なっていたように見える。グナーナシーハは明らかに学究的であり、理想主義的であった。彼は政治に関わりつつも生涯で40冊ほどの本を書いた。また彼は、社会主義的理念を仏教的統治に取り込み、理論化しようとしたと言われる⁴⁷⁾。

グナーナシーハはラーマンニャ派のなかでも主導的な仏教僧であった。ラ

スリランカにおける 1950 年代の政治変革と仏教僧（川島）

ーマンニャ派は主にカラーワ、サラーガマ、ドゥラーワからの支持を受けていたが、ゴイガマであるセーナナーヤカー族はこのニカーヤのパトロンとなっていた⁴⁸⁾。D.S. セーナナーヤカは仏教僧たちが選挙に参加することにはあからさまに反対していたのであるが、仏教僧の支援を得ることには躊躇はしなかった。実際、グナーナシーハとセーナナーヤカは一時期かなりの程度近い関係にあった⁴⁹⁾。セーナナーヤカはシャム派に属する前述のケラニヤ寺院の檀家会のメンバーでもあったが、同時にラーマンニャ派の仏教僧であるグナーナシーハにも接近したのである。

グナーナシーハは、すでに見たように、1956 年に EBP の設立に関わり、スリランカ自由党内でも一定の役割を果たしていた。彼が政治的な仏教僧であったことは間違いない。ただ次第に政党間の対立や議会制度に対する批判者となり、1966 年のクーデター未遂事件にからんで逮捕された。この事件は 1965 年の選挙に勝利した統一国民党政権下で起きたものであり、「文民からなるスリランカ自由党支持派の団体」によって計画されたものとされた。当時グナーナシーハはバンダーラナーヤカ夫人のスリランカ自由党のための活動家として知られていた。1969 年に釈放されたが、彼は最後の 10 年は政党政治から身を引き、アーリヤラトネが始めたサルボダヤ運動に専念した。1970 年に JVP (Janatha Vimukthi Peramuna : 人民解放戦線) の指導者たちから勧誘を受けたが、拒否したと言われる⁵⁰⁾。

グナーナシーハが理想としたものはかつて存在したとされる平等で競争のない村落社会であり、「輪転王 (cakkavattis)」あるいは「正法王 (dharmaraja)」とみなされる徳のある王たちによって統治される国家であった。そのような社会では仏教僧たちは村人の道徳的指針であった。さらに彼らは王や支配層に対しても道徳的忠言者となった。グナーナシーハはそうした理想化された過去を想定し、それを基準として現代社会を批判した⁵¹⁾。彼が特に批判したことの一つが、政党政治による村の結束の破壊である。たとえば、仏教僧たちが特定の政党を支持するなかで、その政党に反対する人びとが寺院をボイコットするという事態も生まれていた⁵²⁾。彼が理想とし、現実の政治に

において求めたものは私利私欲にまみれた政党政治ではなく、徳のある王による統治であった。そして、王たちによる理想の統治が当時の選挙制度から生まれ得るとは彼には考えられなかった。実際、彼は独裁政権の樹立を支持する公開書簡を全国紙に送ってもいた⁵³⁾。彼が選挙制度と政党政治の否定を真剣に考えていたことは間違いない。

他の多くの政治的な仏教僧たちと同様に、経済的不平等はグナーナシーハが強く批判した社会悪の一つであった。彼は資本主義を一定程度認めながらも、物乞いの人びとがいる時に特定の人びとが大富豪となるべきではないと考えた。彼によれば、仏教における上下関係は内面的な徳のみによって決まるものであり、カーストや民族などの外面的な差異によって生み出されるものであってはならない。それゆえ経済的な不平等によってつくられる階級制度は打破しなければならないものであると彼は述べた。その点で、ロシアや中国といった社会主義国が人びとに平等な生活を提供したことを評価した。それは仏教の法に則したものであると彼は考えた⁵⁴⁾。

グナーナシーハによれば、仏教僧に対して蓄財を戒める律 (vinaya) の教えは在家信者にも当てはまる。貪欲、競争、搾取、不平等につながる資本主義社会を批判して、彼は次のように述べた。

各人が入手可能な土地や収入の大きさを制限してしまえば社会から競争は消え去る。もし個人の所得が制限されれば他人の富の略奪や汚職は消え去る。指定された限度を超えた収入は国家へと手渡される。他者の富の略奪の上に成り立つ資本主義はこのようにして終焉を迎える。賄賂によって民主的な選挙に勝つようなこともなくなる。耕作をするためにそれを必要としている人びとに家と土地を与えることが国家の姿勢になるだろう。それまで私人によって所有されていた500エーカーの土地の上に、自らの土地をもつ農民を国家が配置することは可能である。そうすれば、農民たちが収入の一定割合を国家に差し出すことも可能である⁵⁵⁾。

グナーナシーハはこうして社会主義を間違いなく肯定的に見ていたのであるが、ロシアや中国のような社会主義には「人間の内面的特質」を発展させ

スリランカにおける 1950 年代の政治変革と仏教僧（川島）

るという点で問題があると考えた。彼によれば現代の人間はダンマ（righteousness）を欠いており、「動物」と同等である。この内面的特質への関心を欠いているという点でグナーナシーハは西洋化を指向する政権与党をも同様に非難した。過去においてはスリランカの仏教徒たちは平和で簡素な生活を送っていたと彼は考えた。そして、農村において今なお残るこうした生活を取り戻し、復興しなければならないと彼は主張したのである⁵⁶⁾。

5 ウィマラワンサと BC 協定

前節でみたようにグナーナシーハは強く平等を指向していた。経済的平等は彼の大きな関心事であったが、カーストや民族による差別にも否定的であった。しかし彼とは対照的に、非シンハラ人仏教徒コミュニティに対してきわめて排他的な姿勢をとる仏教僧たちも一定数存在した。バッデーガマ・ウィマラワンサ（Baddegama Wimalawamsa, 1913-1993）は当時のそのような仏教僧たちの代表と言ってもよい。ブッダラッキタやグナーナシーハと同様に、ウィマラワンサもまたバンダラナーヤカの選挙戦勝利に大きく貢献した。しかし、タミル人指導者と首相との間に成立した分権化に向けての協定を激しく批判した仏教僧としておそらく最もよく知られている。彼は「シンハラ・オンリー」の「強硬派のなかでも最も強硬」であるとも言われた⁵⁷⁾。

ウィマラワンサは 1954 年に創設されたシンハラ民族協会（Sinhala Jatika Sangamaya）という団体のリーダーであった⁵⁸⁾。この団体はスリランカ・ウィディヤラヤ（Sri Lanka Vidyalaya）という教育機関に関わる仏教僧と在家信者によってつくられたものであった。この施設はラーマンニャ派の中心的組織の一つとしても機能していた。シンハラ民族協会の総裁や副総裁はラーマンニャ派の仏教僧であったが、その執行委員会には他のニカーヤの仏教僧やさまざまな職業の在家信者が入っていた。シンハラ民族協会の成員のほとんどは EBP のなかでも活発に活動し、1956 年の選挙においてバンダラナーヤカを熱心に支援した。ただ選挙後には独自の組織として活動した⁵⁹⁾。

ウィマラワンサが率いるこのシンハラ民族協会は同時代における他の仏教僧団体よりも格段に多数派主義的、シンハラ至上主義的であったようにみえる。この団体の行動計画には、「シンハラ島、シンハラ国、シンハラ言語を、ニカーヤ、カースト、階級の違いにかかわらず」繁栄させるとあった。シンハラ語は唯一の公用語とされるべきであり、また国は不法移民から守られるべきだとした。さらに、エステート農園を国有化し、その後それをシンハラ人に分配すること、海外貿易事業を接収すること、より多くのシンハラ人を軍や行政に雇うこと、シンハラ芸術や工芸を促進することなどを要求した。その上、インド人やパキスタン人が所有するホテル、カフェやタミル映画などをボイコットすることを求めた⁶⁰⁾。

シンハラ民族協会に所属する人びとにとって、セイロン島は明らかに「シンハラ人の島」なのであり、シンハラ人の利益は何にもまして擁護されなければならないものであった。この団体のパンフレットには、「誰もが少数派の権利について語る。多数派コミュニティの権利はどうなるのだ」とあった。またこのパンフレットは、さらにあからさまに、多数派の見解や価値に敬意を払うときにのみ協力と思いやりのある処遇を少数派コミュニティは得られるのだと主張した⁶¹⁾。そして、仏教やシンハラ人の文化が危機に瀕しているという認識によってこうした排他的な主張は正当化された。1955年3月に仏教日曜学校の生徒たちに向けて、「シンハラ人の生命は仏教」であるが、仏教と仏教徒は今日衰退しつつあり、これが続けば「民族の破滅 (destruction of the nations)」につながるだろうとウィマラワンサは述べた⁶²⁾。

前述したように、ウィマラワンサに率いられたシンハラ民族協会はBC協定(バンダーラナーヤカ・セルワナーヤガム協定)を破棄させる運動において重要な役割を担った団体の一つであった。BC協定は「シンハラ・オンリー」政策導入をめぐるシンハラ・タミルの対立のなかでバンダーラナーヤカ首相とタミル人指導者S. J. V. セルワナーヤガムとの間に結ばれた分権化に向けての協定である。両者の妥協のなかで生まれたこの協定は明らかに民族対立緩和のための重要な出発点となり得るものであった。しかしシンハラ・

スリランカにおける 1950 年代の政治変革と仏教僧（川島）

タミル双方の反対者からはきわめて大きな批判を受けた。特にシンハラ至上主義的な勢力からの攻撃は激しかった。その中心の一つになったのは、L. H. メッターナンダ、K. M. D. ラージャラトネ、F. R. ジャヤスーリヤといった過激な在家信者たちであったが、彼らが始めた「サティヤグラハ闘争」には、スリランカ仏教僧会議（Sri Lanka Sangha Sabha）、シンハラ言語戦線（Sinhala Bhasa Peramuna）、トゥリ・シンハラ戦線（Tri Sinhala Peramuna）といった団体とともにシンハラ民族協会も参加していた⁶³⁾。

実際、ウィマラワンサはこの協定破棄に向けて熱心に活動を行った。この協定は 1957 年 7 月 26 日に結ばれたのであるが、彼はその直後にその「危険性」を主張し、その施行を阻止するための運動を主導すると誓約した⁶⁴⁾。BC 協定が最終的に葬り去られることになる 1958 年 4 月 9 日の行動においても彼は間違いなく中心的な役割を果たした。この日、コロombo市内にあるバンダーラナーヤカの私邸の前に、約 200 人の仏教僧と 300 人の在家信者が陣取った。彼らは BC 協定を批判し、その破棄を要求した。こうして首相はこの日の午後 4 時ごろこの協定の不履行をラジオで通告した⁶⁵⁾。その場に集まった人びとのなかで最も著名な仏教僧の一人がウィマラワンサであった⁶⁶⁾。

おわりに

本稿では主に 1956 年の政治変革に大きく関わった 3 人の仏教僧を取り上げた。「シンハラ・オンリー」が主張され、ナショナリズムが激しくあおられたこの年の選挙において、彼らはそれぞれ重要な役割を果たした。しかし、彼らの政治的姿勢は明らかに大きく異なっていた。ケラニヤの大寺院の住職であったブッダラッキタはバンダーラナーヤカ暗殺に関わったとされることでこの 3 人のなかではおそらく最もよく知られている。そのため彼に関する文献も比較的多い。しかしそれらからみえる彼の姿は物質的利益を求め、私利私欲に走る人間の姿である。損得を超えた理念的なものは彼に關す

る文献のなかからはみえてこない。その意味で、ブッダラッキタにとってナシヨナリズムは、あるいは仏教そのものもまた、概して個人的、物質的な目的のための手段に過ぎなかったようにみえる。

逆に、仏教僧の動員に尽力し、1956年の選挙でも重要な役割を果たした仏教僧であるグナーナシーハが個人的な物質的利益の追求に大きな価値をおいていたようにはみえない。彼にとって何よりも重要であったのは平等な社会の実現であり、それを困難にする強欲な資本主義に対する批判であった。その意味で、明らかに個人的な利得を追求したブッダラッキタ的な行動は明確に否定されるべきものであった。また、グナーナシーハは社会の結束を破壊すると彼が見なした政党政治をも否定した。彼が理想としたのは「輪転王」あるいは「正法王」として言及される徳のある王による統治であった。1956年の選挙、その後のスリランカ自由党内での活動で、あるいは彼が参加したと言われる1966年のクーデター計画で彼が求めたものは仏教的理念にもとづく理想の王による統治であった。また彼はカーストや民族による差別にも否定的であった。彼のなかに排他的、シンハラ至上主義的な思想が強くあったようにはみえない。

三人目の仏教僧であるウィマラワンサはブッダラッキタよりも理念的であった。そしてグナーナシーハにあったような平等への指向は彼には明らかに乏しかった。同時代に活発に言論活動、あるいは政治活動を行った在家信者のL. H. メッターナンダやK. M. D. ラージャラトネと同様にきわめて多数派主義的、シンハラ至上主義的であった。彼にとってスリランカはシンハラ人の国であり、シンハラ人の宗教的、文化的、政治的、経済的な利益は何よりも優先されなければならないものであった。この意味で現代のBBS (Bodu Bala Sena) などに所属する過激な仏教僧たちの系譜に最も近いとも言える。

1956年の選挙に向けてきわめて多くの仏教僧たちが「シンハラ・オンリー」を求め、バンダーラナーヤカを支援する政治活動を行った。しかし、この運動を主導した3人のリーダーたちの政治的姿勢の間には大きな差異があった。今日においても仏教僧たちの姿は多様である。キリスト教徒やムスリ

スリランカにおける 1950 年代の政治変革と仏教僧（川島）

ムなどへの憎悪をあおろうとする者たちもいれば、他宗教の聖職者たちとともに「宗教間対話（interreligious dialogue）」を実践している仏教僧たちも存在する。この活動に関わっているある NGO 関係者によれば、宗教間の相互理解を促そうとするこうした活動を半数以上の仏教僧たちは支持している⁶⁷⁾。明らかにスリランカの仏教僧の世界観、あるいは政治的姿勢は多様である。本稿が明らかにしたことはそうした多様性が 1950 年代の政治に深く関わった指導的な仏教僧においてもみられたということである。ただ、一般の仏教僧においても同様の傾向があったか否かに関しては必ずしも明らかではない。彼らの階層や教育などを含めて仏教僧と政治に関しては言うまでもなくさらなる研究が必要である。

注

- 1) 川島耕司「『政治的比丘』の台頭と 1940 年代のスリランカ」『国士舘大学政治研究』第 14 号、2023 年、1-6 頁。
- 2) W. H. Wriggins, *Ceylon: Dilemmas of a New Nation* (New Delhi: Young Asia Publications, 1980, 1st published Princeton: Princeton University Press, 1960), pp. 345-7.
- 3) 川島耕司『スリランカ政治とカースト——N. Q. ダヤスとその時代』芦書房、2019 年、100-101 頁。
- 4) Urmila Phadnis, *Religion and Politics in Sri Lanka* (Columbia, Mo: South Asia Books, 1976), p. 167.
- 5) Wriggins, *Ceylon: Dilemmas of a New Nation*, p. 198; ‘Note on Buddhism and the Left Wing Political Elements in Ceylon’, c1957, DO35/8902, National Archives, London.
- 6) Phadnis, *Religion and Politics in Sri Lanka*, p. 201.
- 7) ‘Note on Buddhism’, DO35/8902.
- 8) ‘Ceylon General Elections’, High Commissioner, Colombo, 16 April 1956, DO35/8609, National Archives, London; ‘Ceylon: Political Situation’, Acting United Kingdom High Commissioner in Ceylon to the Secretary of State, 31 December 1956, DO35/5363, National Archives, London.
- 9) Donald E. Smith, ‘The Political Monks and Monastic Reform’, in Donald E. Smith (ed.), *South Asian Politics and Religion* (Princeton: Princeton University Press, 1966), p. 494. EBP に何人の仏教僧が属していたかは正確には分からない。その数は 1 万人ほどであったとする報告もある。当時における仏教僧の総数は 15,000 から 18,000 人であるともされているため、もしこの通りであれば仏教僧の過半数が参

加していたことになる。ファドニス は全仏教僧の4分の1、3,000から4,000人の仏教僧たちが関わっていたと記している。‘Note on Buddhism’, DO35/8902; Phadnis, *Religion and Politics in Sri Lanka*, p. 187.

- 10) ‘Note on Buddhism’, DO35/8902.
- 11) ‘Ceylon Murder of Prime Minister’, Criminal Investigation Department, New Scotland Yard, 30 December 1959, DO35/8914, National Archives, London.
- 12) Smith, ‘The Political Monks and Monastic Reform’, p. 490; Patrick Peebles, *Historical Dictionary of Sri Lanka* (Lanham, Maryland: Plymouth, Rowman and Littlefield, 2015), p. 201.
- 13) H. A. J. Hulugalle, *The Life and Times of D. R. Wijewardene* (Colombo: The Lake House Investments, 1992), pp. 6-7.
- 14) Kumari Jayawardena, *Nobodies to Somebodies: The Rise of the Colonial Bourgeoisie in Sri Lanka* (Colombo: Social Scientists’ Association and Sanjiva Books, 2000), p. 190.
- 15) Smith, ‘The Political Monks and Monastic Reform’, p. 490.
- 16) K. M. de Silva and Howard Wriggins, *J. R. Jayewardene of Sri Lanka: A Political Biography Volume One: The First Fifty Years* (Colombo: J. R. Jayewardene Cultural Centre, 1988), pp. 203-4.
- 17) ‘The Assassination of the Late Prime Minister’, *Sessional Paper III-1963*, March 1965, p. 43, DO225/13, National Archives, London.
- 18) Smith, ‘The Political Monks and Monastic Reform’, p. 490.
- 19) De Silva and Wriggins, *J. R. Jayewardene*, Vol. 1, p. 207.
- 20) Smith, ‘The Political Monks and Monastic Reform’, p. 491. ブッダラッキタ自身の言葉によると、彼はこの選挙のために5万から6万ルピーを使った。Lucian G. Weeramantry, *Assassination of a Prime Minister: The Bandaranaike Murder Case* (Geneva: Studer S. A., 1969), p. 33.
- 21) De Silva and Wriggins, *J. R. Jayewardene*, Vol. 1, pp. 305-6.
- 22) De Silva and Wriggins, *J. R. Jayewardene*, Vol. 1, pp. 306-310.
- 23) Hulugalle, *The Life and Times of D. R. Wijewardene*, pp. 7, 8.
- 24) Hulugalle, *The Life and Times of D. R. Wijewardene*, p. 95.
- 25) De Silva and Wriggins, *J. R. Jayewardene*, Vol. 1, p. 34.
- 26) Rajan Hoole, *Sri Lanka: The Arrogance of Power: Myths, Decadence and Murder* (Colombo: University Teachers for Human Rights- Jaffna, 2001), p. 3.
- 27) A. Jeyaratnam Wilson, *The Break-up of Sri Lanka: The Sinhalese-Tamil Conflict* (London: C. Hurst & Co, 1988), p. 29.
- 28) D. C. Wijewardena, *The Revolt in the Temple* (Colombo: Sinha Publications, 1953), p. 27.
- 29) 川島『『政治的比丘』の台頭と1940年代のスリランカ』16-19頁。
- 30) ‘The Assassination of the Late Prime Minister’, p. 43.

スリランカにおける 1950 年代の政治変革と仏教僧（川島）

- 31) Wijewardena, *The Revolt in the Temple*, pp. 580, 581, 585.
- 32) Smith, 'The Political Monks and Monastic Reform', p. 494.
- 33) Lasni Buddhibhashika Jayasooriya, 'Caste in Popular Buddhism in Sri Lanka', *Journal of Social Sciences and Humanities*, 2, 2, 2017, pp. 36-9.
- 34) 'Ceylon Murder of Prime Minister', DO35/8914; De Silva and Wriggins, *J. R. Jayewardene*, Vol. 1, p. 315.
- 35) Smith, 'The Political Monks and Monastic Reform', p. 495.
- 36) 'Ceylon Murder of Prime Minister', DO35/8914; 川島『スリランカ政治とカースト』136-7頁。この仲間にはウィマラー・ウィジェーワルダナの子どもたちも含まれていたようである。彼らもまたこのコロombo共同海運に投資していた。またブッダラッキタとともに首相暗殺で有罪判決を受けた H.P. ジャヤワルダナはこの海運会社の専務取締役であったが、保健相になったウィマラーによって抜擢され、アーユルヴェーダ会議 (Ayurveda Board) の議長にもなっていた。'The Assassination of the Late Prime Minister', p. 48.
- 37) 'Ceylon: Political Situation', Acting United Kingdom High Commissioner in Ceylon to the Secretary of State, 31 December 1956, DO35/5363, National Archives, London.
- 38) 'Ceylon Murder of Prime Minister', DO35/8914.
- 39) 川島『スリランカ政治とカースト』133-4頁。
- 40) A.T. Ariyaratne, *Bhava Thanha: An Autobiography Volume One, 1931-1972* (Ratmalana: Vishva Lekha, 2001), p. 290.
- 41) Phadnis, *Religion and Politics in Sri Lanka*, pp. 175-6; 川島『スリランカ政治とカースト』96-100頁。
- 42) Phadnis, *Religion and Politics in Sri Lanka*, pp. 176-7.
- 43) Phadnis, *Religion and Politics in Sri Lanka*, p. 177.
- 44) Ariyaratne, *Bhava Thanha*, p. 291. アーリヤラトネは「報告書」とのみ記しているが、文脈から『仏教の裏切り』であることは明らかである。
- 45) Ariyaratne, *Bhava Thanha*, p. 290. ただこの報告書の英語版の Foreword には、パンニャーシーハは委員として記載されているが、グナーナシーハの名前は見当たらない。*The Betrayal of Buddhism: An Abridged Version of the Report of the Buddhist Committee of Inquiry* (Balangoda: Dharmavijaya Press, 1956).
- 46) James Jupp, *Sri Lanka: Third World Democracy* (London: Frank Cass, 1978), pp. 171, 175. サラナンカラは 1921 年にアナガーリカ・ダルマパーラとともにインドに渡り、共産主義や民族運動に関わるようになった。川島『『政治的比丘』の台頭と 1940 年代のスリランカ』3-4頁。
- 47) Stanley Jeyaraja Tambiah, *Buddhism Betrayed?: Religion, Politics, and Violence in Sri Lanka* (Chicago: University of Chicago Press, 1992), p. 105; Jupp, *Sri Lanka*, pp. 17, 171.
- 48) Jupp, *Sri Lanka*, pp. 59, 85n.
- 49) Phadnis, *Religion and Politics in Sri Lanka*, pp. 170-1.

- 50) Tambiah, *Buddhism Betrayed?*, p. 105; Jupp, *Sri Lanka*, p. 186n; 川島『スリランカ政治とカースト』172-3頁。
- 51) Tambiah, *Buddhism Betrayed?*, pp. 106-7.
- 52) Tambiah, *Buddhism Betrayed?*, p.112.
- 53) K. M. de Silva and Howard Wriggins, *J. R. Jayewardene of Sri Lanka: A Political Biography Volume Two, From 1956 to His Retirement* (Colombo: J. R. Jayewardene Cultural Centre, 1994), p. 128.
- 54) Tambiah, *Buddhism Betrayed?*, p. 117.
- 55) Tambiah, *Buddhism Betrayed?*, pp. 117-8.
- 56) Tambiah, *Buddhism Betrayed?*, pp. 117, 120.
- 57) De Silva and Wriggins, *J. R. Jayewardene*, Vol. 2, p. 15.
- 58) Phadnis, *Religion and Politics in Sri Lanka*, p. 261.
- 59) Phadnis, *Religion and Politics in Sri Lanka*, pp. 260, 262.
- 60) Phadnis, *Religion and Politics in Sri Lanka*, p. 261.
- 61) Phadnis, *Religion and Politics in Sri Lanka*, p. 262.
- 62) Rajesh Venugopal, *Nationalism, Development and Ethnic Conflict in Sri Lanka* (Cambridge: Cambridge University Press, 2018), p. 46.
- 63) 川島『スリランカ政治とカースト』129-132頁。
- 64) Phadnis, *Religion and Politics in Sri Lanka*, p. 270.
- 65) Donald E. Smith, 'The Sinhalese Buddhist Revolution', in Donald E. Smith (ed.). *South Asian Politics and Religion* (Princeton: Princeton University Press, 1966), pp. 477-8.
- 66) De Silva and Wriggins, *J. R. Jayewardene*, Vol. 1, p. 50.
- 67) インタビュー、2022年12月、コロンボ郊外にて。